

水中遺跡の保存と活用を基本とした施設の提案

Proposal for a facility based on the preservation and utilization of underwater archaeological sites

佐藤信治¹, ○小林功基²,
Shinji Sato¹, *Koki Kobayashi²

There are many underwater ruins in the world, the main ones being underwater cities and sunken ships. Research on such underwater ruins can reveal various phenomena. In this way, research on underwater remains is expected to bring many benefits, but due to the characteristics of the underwater environment, it is difficult to conduct sufficient research. In addition, underwater ruins have a long history and are of great value and can be expected to attract many tourists. However, for the same reason that research is difficult, it is very difficult for tourists to casually visit these sites.

This proposal aims to plan a facility that can contribute to the development of research on underwater ruins through architectural manipulation, attract tourists to the facility, and contribute to the benefit of both research and tourism by creating a lively atmosphere in the city.

1. はじめに

世界には数多くの水中遺跡が存在しており,主な遺跡は海底都市と沈没船が挙げられる.世界で見るとジャマイカに存在する「ポート・ロイヤル」,エジプトに存在する「アレクサンドリア海底遺跡」,日本では琵琶湖に存在する「葛籠尾崎湖底遺跡」,長崎県鷹島に存在する「鷹島神崎遺跡」など多くを挙げることができる.このような水中遺跡は研究を行うことで様々な事象を明らかにすることができる.海底都市の沈没原因を研究することで災害の歴史やメカニズムなどの分析を行うことができ,今後起きることが予想される災害に対する対策が期待できる.他にも,沈没船の研究を行い船の構造,使用している材料などを分析することで当時の文明の技術水準を知ることによって役立てることができる.このように水中遺跡の研究を行うことで多くの利益をもたらすことが期待できるが水中という特性上,十分な研究を行うことが困難な立場にある.また水中遺跡は長い歴史を持ち,とても貴重な価値を持っていることから多くの観光客の誘致を期待できる.しかし研究が困難であることと同様の理由で観光客が気軽に見学しにくくということはとても難しい状況にある.

本提案は建築的操作を行うことで水中遺跡の研究発展の一助となり,その施設に観光客を呼び込み,街全体の活気を生み出す研究と観光双方の利益に寄与することができる施設の計画を目指す.

2. 計画背景

2.1 多くの数が存在する沈没船

水中遺跡の中でも沈没船は世界中に数多く存在していることが知られている.特に100年以上前に沈没し,水中文化遺産となりうる沈没船が300万隻は沈んでいると言われている.

2.2 沈没船の困難な研究環境

多くの水中遺跡同様,沈没船もまた複雑な研究環境に置かれている.多くの沈没船は自らの船体によって海流の流れを変化させ,自身の船体に土が覆いかぶさることによって海底に埋まり,無酸素状態となり,非常に良好な環境で保存されている.しかし研究を行う際,沈没船を掘り起こし,無酸素状態の環境を破壊してしまうことが危惧されている.

2.3 沈没船の持つポテンシャル

沈没船には歴史的事件の後に海底に沈んでいったものが多くあることから歴史的価値が非常に高く観光客誘致に役立てることができるポテンシャルを持っている.しかし環境的な観点から効果的に観光客を誘致することができていなく,このような課題に早急に対応することが求められる.



Figure 1. Excavation survey [1]

1: 日大理工・教員・海建 Department of Oceanic Architecture and Engineering, College of Science and Technology, Nihon University.

2: 日大理工・院(前)・海建 Department of Oceanic Architecture and Engineering, College of Science and Technology, Nihon University.

3. 建築敷地

3.1 元寇の沈没船の発見

計画敷地は長崎県松浦市鷹島沖. この場所では鎌倉時代に来襲した元寇の沈没船が発見されている. また, 多くの水中遺跡に比べて比較的浅い水深に位置している為, 水中遺跡の保存と活用に向けた施設を広めていくための計画に関しての初歩的段階として適切な場所であると考えた.

3.2 国の指定史跡への登録

2012年3月に鷹島海底遺跡は沈没船遺跡としては初めての国の指定史跡に認定されたことから非常に注目の集まっている水中遺跡である.

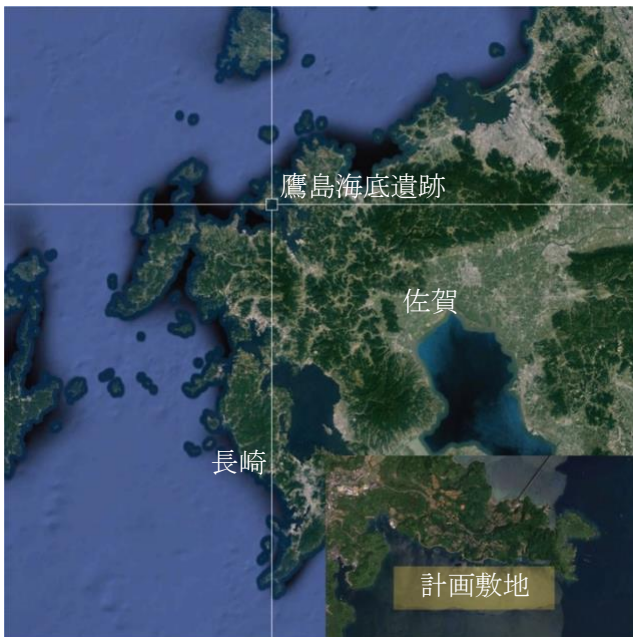


Figure 2. Planned area

4. 基本計画

4.1 建築計画

沈没船周辺をコンクリート構造物で囲い, 内部の水を排出させることで研究環境の改善を図る. 水の排出後用いた構造物の断面に幾つかの諸室を設けていく.

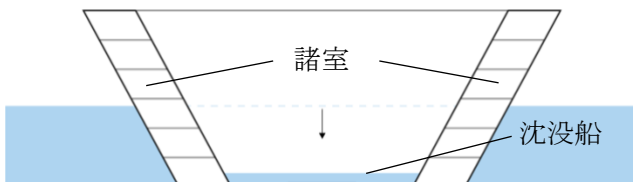


Figure 3. Building plan

4.2 導入施設

- 1) 調査・研究施設
- 2) 展示・ガイド施設
- 3) ホテル
- 4) レストラン
- 5) 交通機能

4.3 調査・研究施設

水中遺跡・沈没船・元寇に関する調査・研究を行う施設を配置する. 遺跡の側に研究所を設けることにより, 効率的な研究活動を見込むことができ, 更なる研究の発展を期待できる.

4.4 展示・ガイド施設

元寇に関する沈没船や出土品の展示並びにガイド施設を行う施設を配置する. この施設を訪れた人々は展示・ガイド施設を通して元寇や沈没船などに関してより深く学ぶことができる. また, この施設を研究拠点としている専門家や研究員からセミナーなどを通して直接学ぶことができ, より充実した見学環境を期待できる.

4.5 ホテル

訪れた人々が滞在することのできるホテルを配置する. 観光客が長崎市街や熊本などに観光するための拠点となる.

4.6 レストラン

計画敷地周辺で採ることのできる海の幸などをはじめとした食事を提供するレストランを配置する. 地域特有の食事を提供することでここでしか味わえない経験を提供する.

4.7 交通機能

水上バスなどを停泊させることのできる停泊場を配置する. 停泊場を設けることで観光客の計画施設への来客を促進していくとともにこの施設が長崎の新たな玄関口となっていく.

5. 参考文献

- [1] 「英語力ゼロで単身渡米」法政大野球部の戦力外投手がアメリカでつかんだ「異色の仕事」
<https://president.jp/articles/-/48950?page=1>
- [2] 鷹島海底遺跡 暴風で沈んだ4千の元寇船 水中考古学 Vol. 25 海底遺跡 暴風で沈んだ4千の元寇船 水中考古学 Vol. 25
https://diver-online.com/archives/go_to_diving/6185
- [3] 鷹島海底遺跡 巨大船団の謎を追え
<http://inoues.net/ruins2/imariwan.html>
- [4] 水中文化遺産研究の可能性
https://rekihaku.repo.nii.ac.jp/?action=repository_action_common_download&item_id=2772&item_no=1&attribute_id=22&file_no=1